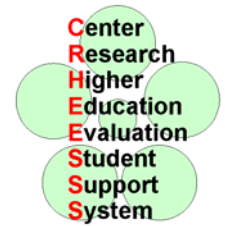


週刊センターニュース

No.134



第134号(2006年11月13日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daiyou_rche/index.htm

「第136回共同学習会」開催案内

日時: 11月20日(月)16時30分~18時(通常と曜日が異なりますのでご注意ください。)

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

テーマ: 「初学者ゼミについて考える」

報告者: 大友 信秀(法学部)

西山 宣昭(大学教育開発・支援センター)

趣旨: 初学者ゼミは今年度4学部で必須科目として開講に至ったが、来年度、さらに3学域化に伴い全学的な開講へと拡大することが予想される。今年度の授業を振り返り、ゼミの実施形態、授業の進め方など今後に向けた議論、情報の共有が必要と思われる。今回は、法学部の大友先生にお願いし、ご自身の授業を振り返っていただく。また、西山も自身の初学者ゼミの授業について報告する。多くの教員の意見交換の場としたい。

第1回 金沢大学全研究科FD研究集会について

平成18年11月7日(火) 本学自然科学系図書館棟1階大会議室において、「第1回金沢大学全研究科FD研究集会」が開催されました。開催時間は、16時半~18時半までのほぼ2時間でした(予定では、16時半~18時)。

研究集会は、柴田正良先生(人間社会環境研究科長)の司会の下、早田幸政(大学教育開発・支援センター教授)「大学院の評価 大学院設置基準改正を踏まえて」、畑安次先生(法務研究科副科長)「法務研究科における大学院教育の実質化」の順に発表がなされました。

このうち、早田幸政「大学院の評価 大学院設置基準改正を踏まえて」では、昨今の大学院制度改革の状況と改革の背景、平成18年大学院設置基準改正の概要、同年3月公表の「大学院教育振興施策要綱」の位置づけとその及ぼす効果、同「要綱」の提案する「実効性ある大学院評価」の意義、「実効性ある大学院評価」の中軸をなす「専門分野別大学院評価」の内容とその検討課題、等について報告がなされました。

また、畑安次先生「法務研究科における大学院教育の実質化」では、法曹養成教育を取り巻く現況と新司法試験制度、法務研究科での学生授業アンケートの実施とFDを通しての結果のフィードバックの状況、FD研修会の開催状況、研究者教員に対する実務研修の実施状況、そして、法曹養成教育という特化された教育目的・目標を実現する上で必要とされるFDの特質と当面の諸課題、等について報告が行われました。

上記2報告を巡り、フロアの聴衆と報告者との間で、活発な質疑が展開されました。

そこで取り上げられた論点として第1報告では、研究科・専攻の全てにおいて、人材育成の目的・目標を設定することが果して可能なのか、学際領域、学融合領域を基礎とする研究科・専攻の人材育成の目的・目標をどう設定していくべきなのか、積み上げ方式の博士課程における博士(前期)課程の教育目標をどう考えればよいのか、といった問題提起がなされました。また、第2報告では、法務研究科で検討されている新カリキュラムはどのような内容のものであり、いかなる方法でこれを運用していこうとするのか、法務研究科に学ぶ学生の授業取組みへの熱意は、どの程度のものか、法務研究科の卒業生の進路についてどのような見通しを立てているか、といった点に係る問題提起がなされました。

本研究集会は、全研究科を対象としたはじめてのFDという意味において、極めて意義深いものでした。論点が精選され、それらを巡って、活発な質疑応答が展開されたことは、大いに評価できるでしょう。今後の課題は、こうした研究集会の参加人員を増やすための意識改革にどう取り組んでいくか、ということの1点に尽きるのではないかとというのが、今回、この会に参加した私の率直な感想です。

(文責: 評価システム研究部門 早田 幸政)

大学教育学会課題研究集会のシンポジウム紹介

本学で開催される標記集会紹介の最終回は、初日11月25日(土)15時15分~17時45分のシンポジウム <「大学における教養教育の評価・認証の基礎」の中間報告について>の紹介

です。

主旨は次のようになっています。<2005年から3年間、「大学における教養教育の評価・認証の基礎」に関する課題研究が行われた。その中間報告を行い、主要な論点について討論する。「評価の目的」を「連携/競争」の最適な組み合わせを通じた「大学セクター」全体の強化、「システム評価」より「内容評価」を重視、「評価主体」は主として大学教員によって構成される学協会的組織、「評価活動」に際しては、経験交流・対話などを通じた相互啓発型活動を重視する。>

シンポジストは、後藤邦夫氏（NPO学術研究ネット、前桃山学院大学）と坂井昭宏氏（北海道大学）の大学史・比較大学論にも造詣が深い二人の論客、そして、今回特に注目されるのが浦野光人氏（ニチレイ（株）社長、経済同友会教育問題委員会委員長）です。これまでも、教養評価のあり方をめぐり、学会大会あるいは課題研究集会で興味深い議論が交わされてきました。昨年、新潟大学で開催された課題研究集会では、本学の田中一郎共通教育機構長（当時）がシンポジストの一人として、GP審査委員としてのエピソードも交えて報告され関心を集めました。今回は、浦野氏によって、企業人の立場から大学教育の何を評価すべきかという直言がなされると期待され、シンポジウム全体がこれまでとは違った展開になるのでは予想します。

浦野氏は、<http://www.unisys.co.jp/club/prefatory/018/index.html>には、<1948年3月、愛知県生まれ。横浜市立大学文理学部卒業後、日本冷蔵（現在のニチレイ）に入社。低温物流企画部長、情報システム部長、経営企画部長を経て、99年取締役、2001年代表取締役社長に就任。上場企業では数少ない情報システム部門出身の経営者>、<http://www.enjyuku.com/k/kp84.htm>には、<幼い頃は野山のあちこちを駆け回り、昆虫採集に熱中した。大学に入る頃には、日本に生息する蝶の約6割を採集し、標本にした>との紹介があり、社長に就任したときには、序列を飛び越えた、異例のスピード出世だったことでマスコミで話題となりました。企業人としてもユニークな存在のようですが、私たちにあって何よりも注目されるのは、今年3月、月刊『Between』での特集「学士課程教育の構築」に発表した「教養教育に舵を切れ」と題する一文によってです。

その一部を紹介すると<教養教育とは一言で言えば「答えのない問題、答えが一つとは限らない問題を徹底的に考えさせる教育」です。職場や社会で直面する課題とは、そういうたぐいのものであります。ITが発達した現代、知識を授けるだけの教育であれば、小学校から高校、もしかすると大学の教育まで含めても、ICチップ1枚に収まってしまいます。大学がそんな知識伝達型の教育だけをするのなら、存在価値はありません。答えがない問題について、頭が痛くなるまで徹底的に考える経験をさせ、自分で答えを見つける力を養う教育に力を入れてほしいと思います。文学や哲学はもちろん、自然科学分野にもまだ解明されていない部分が多いですから、「正解が一つとは限らない問題」に含まれます。・・・専門教育では教員は自分の専門のことを教えればいいのですが、教養教育では、専門分野を通して自分の人生そのものを語る必要があります。ひざを突き合わせて人生観や職業観を語り合い、学生の哲学的思考を深めてほしい。・・・例えば、社会人として求められる倫理感、すべての活動の出発点となる好奇心など。それから、世の中の課題、人間の課題に関する洞察力です。食品会社であれば、食という事業を考える上で、人間の楽しみの源泉という最大のテーマがあり、さらに、健康、安心・安全、利便性といった視点から課題を見つけ、商品の開発や改良につなげます。そんな作業を、事実に基づいてロジカルに進める、そんな力を大学で身に付けてほしい>

このシンポジスト3氏の報告に対して、指定討論者の関根秀和氏（大阪女学院大学、大学設置審議会大学分科会委員）、寺崎 昌男（立教学院、学会長）、司会の館昭氏（桜美林大学、前大学評価・学位授与機構）、佐々木一也氏（立教大学）の4名の大学教育研究者が理論的にどうからんでいくのか楽しみです。（文責：教育支援システム研究部門 青野 透）

第3回専門分野別教育開発セミナーのご案内

テーマ：「科学リテラシーと理系導入教育」

主催：金沢大学大学教育開発・支援センター

日時：12月10日（日）13時30分～17時30分

場所：金沢大学サテライトプラザ3階集会室

講演：小野寺 彰（北海道大学大学院理学研究科教授）
伊藤 俊次（金沢大学大学院自然科学研究科教授）
直江 俊一（金沢大学大学院自然科学研究科教授）
関崎 正夫（金沢大学大学院自然科学研究科教授）

パネラー：上記講演者4名および

濱崎 正明（石川県立金沢錦丘高等学校教諭）

鹿野 利春（石川県立金沢泉丘高等学校教諭）

申し込み方法その他：電子メールにより、「教育開発セミナー申し込み」として、平成18年

12月7日（木）までに、下記連絡先までお申し込みください。参加費は無料です。なお、セミナー終了後、18時より懇親会を会費3000円にて行います。懇親会申込は、12月7日（木）で締め切り、当日申込はできません。

連絡先：金沢大学 大学教育開発・支援センター 西山宣昭（nnishiya@ge.kanazawa-u.ac.jp）